

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	ブレイク・ターンブル
論文題目	Translanguaging in Japan: Perspectives and potentials in EFL academic and creative writing（日本におけるトランスランゲージング：学術的・創造的な英語としての外国語文章におけるの知見と可能性）		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>外国語を学ぶ過程では、学習者にどのような心理的影響が現れてくるのであろうか。本論文では、外国語で表現するための技能獲得に着目して、様々な検討を加えている。第二言語（外国語）の文章作成能力を育成する学習指導では、過去50年にわたり、数回の大きな変更がなされてきた。しかし、外国語学習者を新興のバイリンガル（emergent bilinguals）として捉え直そうとする試みが、国際的な学術研究においては提案されているにも関わらず、外国語の授業では、トランスランゲージングといったバイリンガルの学習方策はめったに取られることがなく、その結果、バイリンガルの表出方法は未だに、外国語学習過程の主流に統合されていない。これは、文部科学省が英語の授業は主に英語で行われるべきである、とする方針を力説する政策を発表した日本の場合に特に当てはまる。一方、最近の研究によると、英語の授業での日本語の使用は、依然として日本人の英語学習者にも教師にも好まれている。教授言語を英語に限定することにより、学習者や教師はどのような影響を受けるのであろうか。そこで生じた大きな疑問は、日本の英語教育において、政策と実際の授業実践の間で拡大しつつある不一致に対して、バランスを取り戻すための解決策があるのかということである。英語が日常的に使用される言語ではない日本で、英語を母語としない日本人が、英語のみで目標言語を教え学ぶことは、果たして可能なのか。こうした学習指導は、どのような意味を持ち、本当に効果的で効率的なのであろうか。こうした問題意識に立って本論文では、次の通り議論を展開した。</p> <p>第1章（導入）では、本研究の背景や目的を明示した。</p> <p>第2章（先行研究概観）では、日本の英語教育の目的・目標とアイデンティティの確立との関わり、トランスランゲージングの詳説、外国語の作文指導について整理した。</p> <p>第3章（研究手法）では、調査の実施・分析方法を詳述した。外国語能力、および学習指導に対する心理的側面に対する研究法や分析法を検討し、本研究で採用する方法論の位置づけを述べた。</p> <p>第4章（日本の英語教育：アイデンティティ確立の観点から）では、英語教育は日本人のアイデンティティに対して、良い影響あるいは悪い影響の、いかなる可能性を持つのかを解き明かすために、日本人の英語学習者（97名）に対する質的研究を実施した。この質問紙調査では、回答者情報、日本人のアイデンティティを構成する要素、英語学習がアイデンティティ確立に対して与える影響について、綿密に調査を行った。数値処理および自由記述を分析し、実態を詳細に把握した。</p> <p>第5章（英語文章執筆過程におけるトランスランゲージング）では、中級段階や上級段階にある日本人英語学習者の学術的・創造的な外国語文章作成過程におけるモノランゲージング（外国語のみで執筆過程を行う）、弱いトランスランゲージング（主に母語で執筆過程を行う）と強いトランスランゲージング（執筆過程で用いる言語は限定せず、自由に外国語と母語を使用する）の効果について</p>			

て、調査と分析を行った。同等の学力で構成された各クラス30名の受講者、6クラスに対して、それぞれ異なった教授・学習言語比率で、英作文と会話の学習を実践し、相違を質的・量的に検討した。

第6章（日本でのトランスランゲージングの可能性）では、英語を学習する際の母語（日本語）の役割に関して、大学レベルの日本人英語学習者（373名）と教師（261名）の意見・見解、そして各々の学習観に基づいて、英語の授業においてトランスランゲージングによる教育方法が受け入れられる可能性に関して、大規模全国調査を行った。質問紙および面談の上で、実際の考え方と行動を詳細に聞き取り、質的・量的分析を行った。

第7章（結論）では、本研究の意義と限界について論じた。

本論を構成する複数の実証研究から得られた、本研究の主要な発見点と教育への貢献は、次の通りである。

まず第4章の調査結果から、日本人英語学習者は、日本語が日本人のアイデンティティの構成要素と考えているため、文部科学省の外国語政策で提唱されたように、英語の授業から日本語を除去することは、英語の学習に対して悪い影響を高める可能性があることが分かった。そのため、英語科教員と政策立案者は英語の授業で、日本人としてのアイデンティティに負の影響を与えずに、学習者の英語力を高めるためには、日本語と英語の両方を効率的に取り入れる教育方法を見いだす必要があると提案できる。この役割を果たす可能性がある教育方法論の一つが、計画的かつ構造的に両言語の使用を促すトランスランゲージングと呼ばれるバイリンガルの言語処理方策であろう。この方法論が日本における英語教育に採用できるかどうかについて、次章で検討を加えている。

第5章の調査結果から、外国語文章の執筆内容に関する構成や概略などの計画を立てる時に、言語間の境を除去する強いトランスランゲージングを使用させた学習者は、思考のための言語を、母語か外国語かのどちらか一つだけに限定された学習者よりも、簡潔で形の整った文章が書けることが分かった。また、母語からの負の影響・転移（negative transfer）や、言語知識と経験不足によって生じる言葉の誤用のより少ないエッセイが書け、より高い点数を修めることが分かった。そのため、文章力をはじめ、第二言語力を全体的に高めるためには、（特に強い）トランスランゲージングの練習方法が、英語の授業で積極的に使用されるべきと提案する。こうした教育方法が学習指導で受け入れられるか否かは、英語学習の過程に関わっている教師と学習者の合意によるところが大きい。そのため、日本の英語教育界にトランスランゲージングによる教育方法が受け入れられるかについて、英語の学習者と教師の意見に基づいて、その可能性を検討する必要性が生じた。

第6章の調査結果から、日本の英語教育において、トランスランゲージングの可能性は高いように思われるが、その成功のためには、学習者と教師がどのようにそれを受け入れるか、また両者が受ける教育と研修の内容に大きく依存することが分かった。そのため英語教師は、教員養成を受ける際に、教授者と学習者が、いつ、どのように授業でトランスランゲージングを使用すれば良いかについても、十分に学ばなければならないことが考察された。そして、授業の中で、適切なトランスランゲージングの方法を、学習者に教示したほうが良いことも提案された。その成果として、学習者は英語と日本語の効果的な使用によって、英語力を高めるだけでなく、新興のバイリンガルとして、どのように国際化が進む社会で生きていけばよいかを理解できるのではないかと考えられる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文の目的は、バイリンガル教育の新たな潮流であるトランスランゲージングの意義や可能性について、日本の英語教育体制下において、理論的・実証的に検討することである。学習者や指導者の心理的側面を踏まえつつ、外国語の表出過程について多角的に検証し、より良い教育実践に向けた示唆を与えることを目標として設定している。具体的には、学習指導で用いる言語を、外国語あるいは母語に絞り込むことが、学習者と教師にどのような影響を及ぼすのかについて考究した。論文では、次の三点に焦点を当てて考察を加えた。

第一点目は、日本人としてのアイデンティティ確立の観点から、英語学習全体に対する意識、および英語を教授言語とする在り方に対する正と負の側面を、詳細な質的研究によって把握した。

第二点目は、目標言語と母語との比率を段階別に変更する、いくつかのトランスランゲージングを導入し、英語の文章作成の過程と結果を分析した。授業で使用する言語を制限・限定する意味について、様々な角度から検討を加えた。

第三点目は、日本人英語学習者と、日本人英語教師に対して大規模調査を実施して、英語の学習指導に対する多様な見解を洗い出し、トランスランゲージングの可能性や整合性を提唱した。

本研究の主要な発見事項と成果、独創的な提案は、次の通りである。

はじめに、母語は学習者のアイデンティティ確立の重要な位置を占めており、母語の使用を一切禁止する指導方法は、学習意欲の低下をもたらし、英語力が低迷する結果となることが、量的・質的に示された。「英語の授業は英語で」と主張する立場への、客観的な反証資料を与える貢献である。トランスランゲージングを取り入れることが、一つの解決策となると提案されている。

また、外国語でのまとまりのある文章の表出を準備する過程においては、母語または外国語と、一つの言語の使用のみに限定することは効果が低下し、両言語を有機的に活性化させて活用することが、最も効果的であることを立証した。英語を話す・書くためには、適度に母語を援用しながら、内容に相当する外国語表現を見いだしていくトランスランゲージングの手法が推奨される。その際に重要なことは、母語に軸足を置いた翻訳に傾斜することなく、積極的に外国語を活性化させた思考を行うこととしている。伝統的な英語教育では、英語を日本語に訳す、日本語から英語に訳すと、常に母語を中心に据えてきたが、直訳をはじめとする日本語からの影響・転移が強く見られることが課題であったためである。

最後に、こうした結果を受けて、英語科教員養成において、トランスランゲージングの理論と実践を提供し、日本人教師と英語母語話者教師に対する指導技術の向上を図る意義を提案した。トランスランゲージングは、バイリンガル教育を発端としていることから、日本の環境に適応させる必要性を強調している。トランスランゲージングの段階別援用方法を丁寧に考案する意味を提唱した。英語母語話者教師も、自らが外国語として学び得た日本語を、授業で理解・表出する重要性を述べている点は、注目に値する。学習者にとって未知の「英語」で一方向的にまくし立て、学習者の発する日本語は軽視する姿勢は、真摯に改善するべきであるからである。

我が国の英語教育界では、英語母語話者が英語圏において、英語を母語としない学習者に対して開発し提案された教育方法論を、全く環境が異なる日本へ持ち込み、混乱がもたらされ続けてきた。英語を母語としない日本人教師が、英語母語話者教師と同等の教育実践を展開することは、脳機能的にも不可能である。母語としての英語力を持ち合わせていない日本人が、英語授業を英語で行うことによる弊害については、

慎重に検討しておくことが求められる。日本人英語教師が表出する句や文に含まれる、英語母語話者には許容されない多種多様な誤りの影響は、いかばかりのものか。本論文では、英語母語話者教師の視点から、我が国の英語教育実践の在り方に対して一石を投じた、類を見ない成果である。日本の教育環境を正視し、教育現場の実情を踏まえた現実的提案を立てる研究姿勢も、高く評価することができる。

英語に対しては、日本人論の見地から、日本人としてのアイデンティティ確立や、日本語習得への悪影響を主張する立場があるが、文部科学省は国策として、学校教育での英語科教授言語は英語のみとする施策を推し進めている。しかし、教授言語を英語に限定する目的や目標は何か、どの段階で何をどのように英語で指導するのか、学習者への効果や影響はいかなるものか、など根本的な課題が山積して、未解決のままとなっている。これは極めて憂慮すべき実態である。学習者の母語を軸足に、アイデンティティの形成を重視する国際化の手法として、トランスランゲージングが一つの可能性を持つことを提案している点は、斬新で今後注目を集める成果であろう。トランスランゲージングによる授業実践を提供された学習者や、トランスランゲージングを取り入れた授業を展開した教授者からは、高い効果と好印象が得られている。もちろん、批判や疑問点などに傾聴して改善を加え、より良い教授学習理論として、トランスランゲージングが洗練されていくことが期待される。本研究の成果を発展させて、日本の教育環境において、学術研究に立脚した、効果的かつ効率的な授業実践に向けた地道な努力が望まれる。

論文審査過程では、英語母語話者教師が、日本の教育課程で効果的に指導を展開するための心構えが話題となった。英語を学ぶために日本人が英語圏へ留学することは通常の姿であり、英語圏で技能を身につけて見聞を深めた日本人英語教師が、運用能力を高める授業実践を展開している。一方、英語母語話者教師は、「英語が母語」というだけで、言語学や心理学、教育学など、英語教育に不可欠な学問領域を学んでいない、「英語が話せる」一般人が少なくはない。その結果、発音の披露役や、一時的な会話の相手役に留まっている現状がある。学習者にとってこうした教育の在り方は、いかなる意義を持つのか、真摯に考える必要がある。

学位申請者は、日本語と日本文化を愛し、自らの母語を外国語として教授するための教育を一貫して受け、我が国の英語教育改善に貢献しようと真剣な努力を重ねている。さらに、日本において得た知見を、国際的な場面で積極的に発信して、世界基準で英語教育の改革に向けた提案を、果敢に行っている。申請者の活躍は、英語母語話者が、英語圏ではなく日本において、真の意味での英語教育学を学び考え、世界に発信する時代の到来を予見させるものである。本研究を基盤として、英語が生活言語ではない日本から、トランスランゲージングという新しい言語習得の理論を精緻化し、教育実践に還元していくことにより、世界的な学術の発展に寄与するものと期待している。

以上から、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成31年1月22日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降